Osaka University Knowledge Archive

Title	大学院における短期海外体験型学習（海外フィールドスタディ）がキャリア形成に与える影響
Author(s)	若林，真美；家島，明彦；上須，道徳；思，沁夫
Citation	大阪大学高等教育研究. 7 P.23-P.30
Issue Date	2019-03-20
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/71717
DOI	10.18910/71717
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

大阪大学高等教育研究　7（2018），23 − 30

【教育実践レポート】

大学院における短期海外体験型学習（海外フィールドスタディ）がキャリア形成に与える影響

若林　真美[※1, 2]・家島　明彦[※3]・上須　道徳[※4]・思沁夫[※1]

Impact of the Short-term Overseas Field Study Program on Career Development : Follow-up Study of Graduate Students

Mami WAKABAYASHI[※1,2], Akihiko IESHIMA[※3], Michinori UWASU[※4], SI Qinfu[※1]

グローバル社会において活躍できる素養を身に着ける教育プログラムとして，海外での体験型学習が期待されている．学際融合的な短期海外体験型学習（海外フィールドスタディ）が学生のキャリア形成に与える中長期的効果について検討することを目的とし，大阪大学大学院修了生にインタビュー調査を実施した．海外フィールドスタディを経験した学生は，専門分野を超えたチームワークによって国際社会に通用する多角的な視野を養い，コミュニケーション能力を高め，自分のキャリアにつなげていることが示唆された．大学院を修了した高度専門人材のより積極的なグローバル社会での活躍を促すため，大学院における短期海外体験型学習の教育効果を高めるための工夫や課題の共有が重要である．

キーワード：短期海外体験型学習，海外フィールドスタディ，キャリア，トランスファラブルスキル，グローバル人材，大学院

Overseas study programs are expected to be the educational programs that will cultivate globally competent human resources.　The aim of this study is to investigate the impact of a short-term field study program on their career development. The study carried out interviews with graduates who had participated in the short-term overseas field study program 5 to 8 years ago about their career development since then. The results reveal that, through the experiences of the short-term overseas field study program, the students acquired several skills, including the ability to understand multiple perspectives (based on the inter-disciplinary teamwork), facility communicating in the global setting, and professional leadership. In order to enhance the caliber of global workforce (specifically those with graduate-level education), it is important to share the benefits and challenges of the short-term overseas field study program. This program has the high potential for fostering globally competent human resources .

Keywords：short study abroad, overseas field study, career development, transferable skills, globally competent human resource, graduate students

所　属：[※1]大阪大学グローバルイニシアティブ・センター　[※2]名古屋大学大学院　「ウェルビーイングinアジア」実現のための女性リーダー育成プログラム　[※3]大阪大学全学教育推進機構　[※4]大阪大学COデザインセンター

Affiliation :[※1]Center for Global Initiatives, Osaka University, [※2]Women Leaders Program to promote Well-being in Asia, Nagoya University, [※3]Center for Education in Liberal Arts and Sciences, Osaka University, [※4]Center for the Study of CO* Design, Osaka University

連絡先：wakabayashi-mami@umin.ac.jp ／ wakabayashi@met.nagoya-u.ac.jp（若林　真美）

1. はじめに―大学院における短期海外体験型学習[1]―

近年日本では，グローバル社会で活躍できる人材育成に対する社会的ニーズが高まっている（芦沢，2013）.「産官学によるグローバル人材の育成のための戦略（文部科学省，2011）」によると，グローバル人材とは，「世界的な競争と共生が進む現代社会において，日本人としてのアイデンティティを持ちながら，広い視野に立って培われる教養と専門性，異なる言語，文化，価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性，新しい価値を創造する能力，次世代までも視野に入れた社会貢献の意識などを持った人間」である．このようなグローバル人材としてのコンピテンンシーを身に着ける上で，海外教育機関での学習や海外での体験型学習などが有効であると期待され，大学におけるグローバル人材育成プロジェクトの開発・研究が進められている（中矢・梅村，2013）.

2010年以降「グローバル人材の育成」が提起され，日本全国の大学において，短期海外体験型学習が広く注目されるようになった（子島・藤原，2017）．3か月以上の海外教育機関での学習経験がキャリア形成に与える影響については，既に調査が行われてきたが，2週間未満といった短期の海外での体験がキャリア形成に与えるインパクトの中長期的な効果に関する調査は未開拓の領域である（新見・岡本，2017）.

また，2011年より「博士課程教育リーディングプログラム」という，俯瞰力と独創力を備え広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダー育成を目的とし，専門分野の枠を超えて博士課程前期・後期一貫した大学院教育（日本学術振興会，2011）が開始されている．全国で60件以上の博士課程教育リーディングプログラムが採択されている．短期海外体験型学習は，博士課程教育リーディングプログラムにも取り入れられており，大学院での教育プログラムとしての重要性はますます高まっているといえる.

短期海外体験型学習は，産業界におけるグローバル人材育成ニーズの高まり，大学院における教育改革ニーズの高まり，といった文脈で注目を集めている．そこで，大学院教育の中長期的な効果，とりわけ大学院における短期海外体験型学習がキャリア形成に与える影響についての検討を目的として，大学院生の追跡調査を行うことにした.

2. 先行事例―大阪大学における短期海外体験型学習（海外フィールドスタディ）

大阪大学グローバルコラボレーションセンター（以下，GLOCOL）が2011年度よりグローバル人材の育成を目的として全学的に提供していた授業科目「海外フィールドスタディ」[2]には，6年間で延べ315名の大学院生[3]が参加した（大阪大学グローバルコラボレーションセンター，2016）．GLOCOLが実施する「海外フィールドスタディ」は単位を付与する授業科目であり，少人数グループでそれぞれの国において，設定された個別テーマに沿った現地実習を行う授業である[4]．その現地実習の前後に個々のグループおよび全体での事前学習と事後学習を行い，約半年かけて実施される.「海外フィールドスタディ」受講希望学生は，書類と面接によって審査・選抜されている[5]．事前学習では，グループごとに渡航する地域に関する基本情報を学び，プログラムごとに設定されたテーマに関する専門的な講義を受講し，個人のフィールドスタディでの目標や計画をそれぞれの関心や専門性に基づき設定する．事後学習では，現地実習で得た知見や経験を振り返り，報告書を作成し報告会でのグループ発表を全体で行う（敦賀ほか，2016）.

GLOCOLでは，2007年設立時から「海外フィールドスタディ」が2011年度に授業科目として単位化される以前の間にも，海外研修や海外フィールドワーク等と呼ばれる短期海外体験型学習を研究科と協働実施し，また「海外フィールドスタディ」の科目開講後は，大阪大学大学院博士課程教育リーディングプログラムに対して海外体験型学習のノウハウの提供や共同開催を行ってきた．大阪大学では「海外フィールドスタディ」という授業科目の受講者に加えて，多くの大学院生が2007年から学際融合的な短期海外体験型教育プログラムを体験している.

短期海外体験型学習には，語学研修，海外ボランティア，ワーキングキャンプ等，様々な形態が存在するが，本論ではGLOCOLが実施してきたような「大学が主体的に企画運営し，学生がグループで現地調査や視察などを行う2週間未満の短期海外体験型学習」（以下，総称して海外フィールドスタディと呼ぶ）に焦点を当てて議論する.

3. 調査目的―海外フィールドスタディの効果検証

調査目的は，海外フィールドスタディへの参加経験が，5～8年後のキャリア形成にどのような効果をもたらすのかを検証することである．2013年，GLOCOLが実施する海外フィールドスタディ等の授業全般に関する紙面アンケートが大学院修了前の26名の学生を対象に実施された（調査者もそのアンケート回答者の一人である）．その設問には，「GLOCOLのプログラムに参加し，自身の研究およびキャリア形成に役立ったか」という項目が含まれていた．今回，このアンケートにヒントを得て，GLOCOLのプログラムに参加して大阪大学の大学院を修了した社会人を調査対象として，海外フィールドスタディから5～8年後の具体的な効果（主に大学院修了後のキャリア形成にどのように役立ったのか）について調査することにした．

4. 調査方法―調査協力者の概要とインタビュー内容

調査協力者は，2010年から2013年に海外フィールドスタディに参加した学生のうち，調査同意が得られた12名（男6名，女6名）であり，その概要は表1のとおりである．

調査協力者の大学院在籍時の年齢は20代が10名，30代以上が2名であった．また，大学院在籍前に社会人経験を持つ学生は3名含まれていた．なお，12名のうち10名は博士前期課程修了後に就職しており，現在の立場は，企業，教育職，行政等，多岐にわたる．

調査協力者のサンプリング方法は，調査者の大学院当時のネットワーク[(6)]ならびに海外フィールドワークによってできた参加者同士のネットワーク[(7)]を活用した機縁法（スノーボールサンプリング）であり，調査者が調査協力者に直接電子メールを送信することにより，調査協力を依頼した．

インタビューは，オンライン会議システムを使用し，インタビューガイドを用い，半構造化面接を実施した（表2）．インタビュー時間は一人あたり平均40分程度（説明も含む）である．

表2　主な設問項目（インタビューガイドより）

1．調査協力者の大学院修了後の進路と現在の職業
2．調査協力者が参加した海外フィールドスタディの概要
3．参加した海外フィールドスタディで印象に残っていること
4．海外フィールドスタディでの経験が大学院修了後のライフイベントに生かせたこと
5．自分の考え方や価値観に影響を与えた海外フィールドスタディでの出来事
6．キャリアに活かすためのプログラムへの提言、改善案

表1　調査協力者の概要

ID	性別	専門分野*1	修了年度	現職	大学院修了後のキャリア（ライフ）パス	社会人経験*2	参加国	参加年度	参加学年*3	渡航日数*4	参加学生数
1	女	文	2012	研究推進員	研究生→日本語教師→大学研究員→現職	なし	中国*5	2010	M1	9日	4名
							ベトナム*5	2010	M1	8日	6名
							パラオ*5	2010	M1	7日	4名
2	男	文	2013	会社経営	（在学中社会人学生）現職継続 （2度目の社会人学生中）	あり	モンゴル	2012	M1	11日	5名
3	男	理	2012	公務員	新卒で現職（3部署目）	なし	ベトナム*5	2010	M1	8日	6名
4	女	文	2012	財団職員	臨時行政職員→青年海外協力隊→現職	あり	フィリピン	2011	M2	10日	5名
5	男	理	2014	民間企業（開発職）	新卒で現職	なし	ベトナム＆タイ*5	2012	M1	10日	6名
6	女	文	2013	高校教員	新卒で現職（産休中）	なし	タイ	2011	M1	9日	5名
							中国	2012	M2	7日	6名
7	男	理	2015	民間企業（技術職）	新卒で現職	なし	モンゴル	2013	M1	11日	3名
8	男	文	2016	客員教員 学校法人監事	（社会人学生）→定年退職→博士後期課程修了→現職	あり	モンゴル	2013	D1	11日	3名
9	男	理	2015	行政法人職員	新卒で現職（2部署目）	なし	モンゴル	2013	M1	10日	3名
10	女	理	2012	博士研究員	博士後期課程進学→（産休）後期課程修了→現職→（産休）→復職	なし	ベトナム*5	2010	M1	8日	6名
11	女	文	2013	民間企業（事業管理）	（博士前期課程在学中に青年海外協力隊） 新卒で現企業（海外駐在中）	なし	タイ	2012	M1	9日	6名
12	男	理	2012	民間企業（事業企画）	新卒で現企業（海外駐在あり）	なし	パラオ	2011	M2	10日	5名

*1：専門分野は，人文社会学系（文学研究科，人間科学研究科，法学研究科，経済学研究科，言語文化研究科，国際公共政策研究科）を『文』，医歯薬理工系（理学研究科，医学系研究科，歯学研究科，薬学研究科，工学研究科，基礎工学研究科，情報科学研究科，生命機能研究科）を『理』と表現している．＊2：社会人経験は大阪大学大学院入学前の社会人経験の有無を表記している．＊3：Mは博士前期課程または修士課程を，Dは博士後期課程または博士課程を示す．＊4：渡航日数は日本から出発して帰国日まで（移動日も含む）．＊5：2010年の中国，ベトナム，2011年のベトナム＆タイは授業科目の「海外フィールドスタディ」ではなく，GLOCOLと薬学研究科共催研修プログラムである．GLOCOLの海外フィールドスタディは2011年1月以降に試行プログラムが行われ，2011年度より授業科目として単位化されたプログラムとなる．＊参加年度，参加学年，渡航日数，参加学生数は当時の海外フィールドスタディの報告書から得られた情報を元に記載している．

本調査は大阪大学での研究倫理審査を経て実施された．調査の実施にあたり，調査協力者に対し，事前に電子メールで，さらにインタビュー冒頭に口頭にて調査の趣旨と方法について説明した．調査協力は任意であること，参加同意はいつでも撤回可能であること，不参加によって不利益が生じないこと，インタビュー内容は録音し利用されること，データは論文執筆投稿の目的にのみ使用されること，データ中の個人情報は匿名化されること，研究終了後に録音データは破棄されることも併せて説明した．

5. 結果と考察―キャリア形成に与える影響の分析

インタビューの録音データから逐語録を作成し，キャリア[8]形成に影響を与えたと考えられるエピソードを抽出して要約した．その要約をラベル化した集計結果を協力者のID番号とともに示したのが図1である．エピソードの要約と表1の調査協力者の属性をもとに，海外フィールドスタディがキャリア形成に与える中長期的な影響に関して，以下4つの観点から考察した．「　」は調査協力者が語ったエピソード，（　）は表1のID番号を示す．

＊（　）の数字は表 1 の ID 番号を示す

図1　キャリア形成に影響を与えたエピソード集約結果

1）学生の海外渡航歴による違い

今回の調査協力者は，全員が海外フィールドスタディへの参加以前に海外渡航を既に経験していたが，海外渡航歴によって海外フィールドスタディの教育効果に違いが見られた．

海外フィールドスタディに参加する前に，仕事で駐在していた人や青年海外協力隊に参加していた人，海外教育機関での学習や自身の研究のため海外フィールドワークをしていた人，6回以上の海外旅行経験がある人を海外渡航経験が多いグループとすると，12名中6名であった．残りの6名を比較的海外渡航経験が少ないグループとして，両グループを比較検討した．

海外渡航経験が少ないグループに属する6名にとって，開発途上国と呼ばれる国の人々の生活に入り込むという海外フィールドスタディでの体験は非常にインパクトが強いようである．結果として，グローバルな環境で働くことに興味を持つようになったり，グローバル社会への理解を深めたりといった考え方の変化が生じたようである．例えば「今，外資系の企業にいるのも海外フィールドスタディがきっかけの一つだと思う．就職活動時期に国内企業からも内定をもらっていたが，外資に就職を決めたのは，グローバルに働きたいという思いが1つあった．現在も，海外のグループ会社のミーティングにオブザーバー参加して，将来的にはその部署に行きたいと考えている．(5)」という国際的なキャリアへの関心が高まったという発言や「海外フィールドスタディ参加後に自分の日常の消費行動がどこに影響を及ぼしているかを深く考え行動するようになった．海外フィールドスタディで，ヒツジとヤギの問題[9]を考えさせられ，人々がカシミヤを嗜好するから，消費されている土地とは全く違うところで色んな問題が起きているということを知る機会になった．(7)」といった発言があった．このように，海外渡航経験が少ない場合，海外フィールドスタディは短期間であってもインパクトの強い経験となり，その後のキャリアや価値観へ影響を与える経験になることが多いと考えられる．

一方，海外渡航経験が多いグループに属する6名は，現地の生活に入りこみ現地課題について調査を行うといった主体的な経験を通して，キャリアアップに対して意欲的になるというに結果につながっていたようである．例えば，家族や学生同士で海外旅行に行き，海外フィールドスタディの現地実習地である国にも旅行で海外フィールドスタディ前にも3回訪れていた調査協力者は，「海外フィールドスタディでの研修経験があったからこそ，職場での海外研修への公募に自信をもって応募できた．(6)」と振り返っていた．海外渡航経験が多い場合でも，海外フィールドスタディがキャリア形成を促進させ得ることがインタビュー結果から示された．

それまでの海外渡航歴によって，海外フィールドスタディから受けるインパクトの大きさに違いが見られたが，学びの成果における共通点も示唆された．それは視野の広がりやビジネスチャンスへの挑戦意欲の向上である．海外フィールドスタディの参加によって学際的・国際的な視点で困難な課題に挑戦する経験が得られたから

ではないかと考えられる．

事前に参加学生の海外渡航歴（期間だけでなく訪問先や体験内容も含む）を教員側が把握し，安全危機管理や異文化への受容態度の促しといった支援を参加学生一人ひとりに合わせて行うことは，重要である．海外渡航経験が少ない者にとっては参加への心理的ハードルを下げる効果が期待でき，海外渡航経験が多い者へは今までの体験と異なる付加価値を与える効果が期待できる．

2）学生の専門分野による違い

理系学生と文系学生では，海外フィールドスタディからの影響に違いが見られた．

理系学生では，海外フィールドスタディを1つのきっかけとして海外に関連した職業選択を行ったという発言が多く見られた．例えば「国際協力という分野に興味を持ったきっかけが，海外フィールドスタディであり，それに関連した職業に現在ついている．(9)」のような発言は，理系学生（6名中4名）に見られた．ある理系学生は，「海外フィールドスタディが自分の専門分野とは異なる外資系企業で働こうと決断したきっかけの1つになった．（中略）その企業でシンガポールでの駐在等も既に経験したが，今後さらにグローバルな部署への移動といった将来展望も持っている（12)」と発言していた．

一方，文系学生では，海外フィールドスタディが職業選択に影響を与えたとする発言も見られたが，もともと志向していた職業の方向性が強化される形であった．その背景として，今回インタビューした文系学生は，もともと国際協力や海外で働くことに興味がある学生や，自分の研究分野や研究方法として，海外フィールドスタディでよく行われる対面インタビューやアンケート調査等を経験している学生が多かったということが考えられる．

文系学生（6名中4名）は，海外フィールドスタディに対して自分の研究やその後のキャリアへの付加価値を見出していた．例えば「フィールドワーク上でのコミュニケーションの取り方を実践的に学ぶことができ，自分の修士課程の論文をまとめていく上でのヒントが得られ役立った．(4)」や「(大学院修了後就職したがその後）転職活動をしていたときに，GLOCOL教員から自分のバックグラウンドや経験を活かすことができる国際的な仕事の紹介を受けた．(1)」といった発言が見られた．

また，海外フィールドスタディへの参加を通じて，語学の必要性を痛感したのは，理系・文系学生共に同じであった．しかし，理系学生と文系学生で学びたい言語に違いが見られた．理系学生では，渡航先で出会った学生が専門的な内容の議論を英語でできることを目の当たりにしたり，他の参加学生の英語力と自分の英語力を比較したりすることを通じて，海外フィールドスタディ後もっと英語力を強化したいという発言（6名中3名）が見られた．一方，文系学生では，現地の人々とコミュニケーションが取れるように簡単でも現地語の習得が大事と感じたという発言（6名中4名）が見られた．理系学生に男性が多く文系学生に女性が多いので男女の差である可能性も検討したが，理系学生の女性も英語の必要性を述べており（10)，逆に文系学生の男性は現地の歴史や現地語の習得といったことに関心を寄せている点（8)から，違いは性別ではなく学問領域の差によるものでないかと推察される．英語や現地語の習得の契機となるような仕組み，例えば，事前学習時にグループディスカッションを英語で行う，現地語でのあいさつを学ぶといったことを取り入れることで，学生の学習意欲をさらに高め，これらの参加学生のニーズにも対応していくことが可能であろう．

教員側が，参加者の興味関心や専門性，海外フィールドスタディから何を得たいと考えているのかといったことを事前に把握し，それらを考慮することで，学生のキャリア形成に対する効果を高める可能性があることが示唆された．

3）学生と海外体験先との継続的交流

海外体験先との交流が今でも続いているケースが確認され，短期の海外フィールドスタディであっても長期の関係性に発展・継続する可能性が十分あることが明らかとなった．

海外フィールドスタディで得られた現地の人々とソーシャルネットワーキングサービス等を通じて海外フィールドスタディ終了後から現在に至るまで関わり続けている人が3名（1,6,11）いた．また海外フィールドスタディでの渡航先にプライベート等で再び訪問したという人が3名（1,2,11）いた．さらに，海外フィールドスタディ終了後のグループ報告書を現地語に翻訳し，1年後に現地の人々に還元したという人が3名（7,8,9）いた．

現地の人々と協働しながら現地課題を理解しようと調査し提言をしていく中で，授業という枠を超えた現地の方々との長期的な関係が形成されたとも考えられる．例えば「以前はニュースや本でしか分からなかった国が，現地の人と実際に会って一緒に調査して，今でもその人と繋がっていることで，その国をより身近に感じている．(1)」と述べた調査協力者の一人は，世界の出来事

を身近に感じており，現在は環境教育を通じて持続可能な社会のための行動について次世代に伝える立場に就いている．このような人材は，国際理解教育の目指す「グローバル市民」としての資質[10]が獲得（藤原，2016）された状態であり，海外フィールドスタディは短期であっても長期的な観点で見るとグローバル人材の育成や個人のキャリア形成に役立っているといえよう．

このように参加学生が現地との長期的な関係を構築できた理由として，引率教員が報告書の作成支援や交流会等も含め，海外フィールドスタディ授業終了後も継続的に参加学生とコミュニケーションを行っていたことが考えられる．海外フィールドスタディの渡航先は，引率教員のネットワークが生かされる形で実施される．そのネットワークを通して，参加学生は，引率教員が持つ現地に関する専門的な知識を知ることができ，現地大学との協働から，現地大学生や大学院生，現地研究者と接する機会を得ることができる．「現地研究者との議論によって，自分の研究姿勢が相対化できたことが一番強く印象に残っている（3）」という発言もあり，現地大学との協働の効果も確認された．

教員側が事前に海外体験先との良好な関係を構築しておくこと，学生が海外体験先との長期的な関係を構築していきたくなるような工夫をしておくことも，海外フィールドスタディの教育効果を高める条件である．

4）参加学生の多様性（ダイバーシティ）

海外フィールドスタディがその後のキャリアに影響を与えたものとして，調査協力者の全員が，専門や年齢，背景の異なる多様な大学院生同士が学び合うことによる学習効果について言及しており，海外フィールドスタディ参加学生の背景の多様性も重要であることが示唆された．

各専門性を持った大学院生が一つの課題に集中的に取り組むといった学びのプラットフォームとしての役割を海外フィールドスタディが担うことができ，それが長期的な波及効果をもたらしていると考えられる．具体的には「海外フィールドスタディの授業をきっかけに，そこで出会った仲間と別のメンバーを加えて大学内の助成金に応募して，再び自分たちで自主的な海外フィールドスタディを行った．（5）」という発言（大学院での更なる自主的な学びの構築）や，「海外フィールドスタディのメンバーから刺激を受け，1つの物事をいろんな視点で見る，1つの現象にいろんな課題を設定できることの大切さを学び，それが社会に出ても役立っている（11）」という発言（社会に出てからも役立つ多角的な視点の獲得），「海外フィールドワークのメンバーだった人に誘われた異分野学術交流会がその後の大学院生活の活動の幅を広げ，そこで出会った人達とは今でも強くつながっている．（3）」という発言（異分野とのネットワーク形成）が確認された．

グループで現地調査し課題解決に向けた提案をするという体験を通して，参加学生はグループメンバーの視点を取り入れることができ，そのことが広い視野に立って培われる教養と専門性に結び付くのではないかと考えられる．例えば「大学院修了後，2度目の大学院に進学するきっかけになったのは，海外フィールドスタディなどの高度教養プログラムにより学問の面白さ，奥深さに気付けたからだと考える（2）」といった発言に見られるように，幅広い教養への関心を高め，更なる進学にもつながる可能性がある．

また，海外フィールドスタディで得られる出会いは少なくとも2種類ある．ひとつは，訪問先での異なる言語・文化・価値観との出会いである．もうひとつは，異なる専門分野との出会いである．大学院で他の専門分野の仲間と一つのテーマに沿って協働していく過程そのものが，異なる価値観との出会いとなる．「海外フィールドスタディで様々なバックグラウンドの専門性を持ったグローバルチームと出会い，目的に対する解決策を求めていく過程を通じて，専門性の相乗効果が発揮された．（12）」といった学びの実感に関する発言が多く見られた．このように，参加学生は海外フィールドスタディを通して，多様な価値観を認め合い，視野を広げていた．

さらに，海外フィールドスタディの効果として参加者同士の長期的なネットワーク形成があげられる．引率教員を中心とした継続的なネットワークが形成されているという発言（1,2,6,7,8,9）や参加学生らが大学院修了5年後にソーシャルネットワーキングサービスで海外フィールドスタディの参加者へ呼びかけ交流会を開催したという発言（11）が確認された．大学が主催する海外フィールドスタディのような短期間で印象深い海外経験を共有することは，学生個人が主体となる海外教育機関での学習等で得られる現地ネットワーク形成とは異なった形で，学術分野を超えグローバルな社会に関心を持つ同窓生同士の継続的なネットワーク形成に寄与できると考えられる．これも参加学生が多様であったからこそである．学生の多様性を担保することも海外フィールドスタディの教育効果を高める可能性がある．

6. 海外フィールドスタディへの提言

海外フィールドスタディの経験後5～8年経った社会人12名にインタビュー調査を実施し，それぞれが学んだことをいかに自らのキャリアへとつなげていったかを整理した．調査協力者のグローバル人材としての視野を広げる契機になった出来事である海外フィールドスタディにおける具体的なエピソードを紹介した．調査結果を踏まえ，大学院生にとってキャリア形成にインパクトのある海外フィールドスタディを今後より充実させていくための工夫を3点挙げる．

第一点目は，語学についての工夫である．多くの学生が英語学習や現地語の習得に関する意欲やニーズを持っていることが明らかになった．対策として，事前学習時に，英語でコミュニケーションをとることに慣れるための機会，現地の歴史や現地語の勉強が行えるような機会を持つといったことが考えられる．例えば，実際に調査者が企画運営した海外フィールドスタディでは，事前学習の15回の授業をすべて英語で実施し，博士課程に在籍する留学生による現地語の学習を取り入れた（中西ほか，2018）．その結果，習得レベルの違いは大きいが，英語で意見を述べ，現地でも英語で質問し，現地語であいさつをして現地の人々とコミュニケーションを積極的にとろうとする学生の姿が見られた．短期間の事前学習や現地実習であっても実際に海外へ訪問し現地の人々とコミュニケーションをとる機会があるので，明確な目標を持ちやすく，英語学習や現地語習得の意欲を高め，習った言語を運用することが可能である．

第二点目は，学習負担についての工夫である．海外フィールドスタディへの参加意欲の高い学生であっても，自分の専門分野における研究課題の負担が増す中で，自分の専門分野とは異なる内容を学ぶことは，学習負担が大きい．しかしながら大学院生であれば，一定以上のレベルで相互に教え合うことが可能である．そこで，現地実習のテーマを各人の専門性につながるようにすることが必要である．また，現地滞在中も学んだことをお互いの専門分野からの相互の意見交換を促すことで，学生同士が現地実習テーマに関連した分野について自然に学びあう環境を整えることも必要である．実際に調査協力者からもプログラムへの提言として，「事前学習も大事だが，振り返りや現地での自分の専門分野について仲間との意見交換をする方がより頑張れる（4）」という発言や「成果発表会以外にも同じ時期に別の国に行った学生同士の帰国後の交流等で自分が感じたことを表現する機会が増えればもっと学びが深まったと感じる（7）」といった発言が見られた．参加学生の専門が活かせるようなテーマ設定とグループ編成によって，学習負担感を軽減させつつも事前学習をしっかり行わせることが可能となる．

第三点目は，学びの言語化についての工夫である．特に，事後の振り返りで学びをできるだけ言語化させる機会を持つことで，キャリア形成に影響を与える要因となることがインタビュー調査から明らかになった．例えば，海外フィールドスタディでの報告書に書かれている事項と今のキャリアを関連付けて発言するケースがいくつも見られた．また事後の成果発表会だけでなく，海外フィールドスタディへ参加する後輩に向けて自らの体験談とその後のキャリアの語るといった機会を設けることは，次の体験者にとっても有益である．「海外フィールドスタディへ参加する際，先輩から海外フィールドスタディの体験談とその後の活用事例を聞けたことで，自分のキャリア展望に活かせた（11）」という発言も見られた．学びの言語化を促し，自分自身の行動や考えを振り返り，次の行動への契機につなげていくことでキャリア形成における海外フィールドワークのインパクトを強化していくことができると考える．

7. おわりに―今後の課題

インタビュー調査を通して，2週間未満の短期海外体験型学習（海外フィールドスタディ）の影響（中長期的な教育効果）を，キャリア形成に与えるインパクトという観点から検討した．その結果，海外フィールドスタディのような短期の海外体験でも十分に大学院における学際融合的な学習意義を高め，グローバル人材の育成に寄与できることが示唆された．今後さらにプログラムの教育効果を高める様々な工夫やその効果検証が必要である．また，経験者と未経験者のコンピテンシー比較によるプログラム自体の教育効果の検証も重要である．さらに，短期海外体験型学習には，調査研究型（課題発見型）や問題解決型等のプログラム構成が考えられるが，海外フィールドスタディ担当教員によるプログラム構成が参加学生のキャリア形成に対してどのように影響するのかについても別の機会に検討していきたい．

受付2018.10.1／受理2019.1.9

謝辞

調査に協力してくださった皆様にお礼申し上げます．またこのような印象深い海外フィールドスタディを企画・運営し，引率してくださった教員の方々に心より感謝申し上げます．

付記

本研究は大阪大学COデザインセンター研究倫理委員会の承認を受けて実施したものです（2018-2）．

注記

(1) 海外体験型学習には，海外の教育課程での学習，インターンシップ，ボランティア等の様々な形態があるが，本調査では，大学が企画運営する調査や視察などを行う2週間未満のグループで行うフィールドワークに限定して論ずる．

(2) 授業科目「海外フィールドスタディ」は2018年度現在，大阪大学グローバルイニシアティブ・センターにおいて開講されている（思沁夫＆上須，2018）．

(3) 16研究科のうち14研究科の学生が参加した．

(4) 6年間で開拓された海外体験先は19カ国であった．

(5) 学生は参加費用を自己負担する必要があるが，渡航費の一部は大学から助成されるためである．

(6) 調査者はGLOCOLの海外フィールドスタディ参加者の一人である．

(7) 海外フィールドスタディ参加者同士のネットワークがどのように形成されたかについては，5．結果と考察の4）で後述する．

(8) キャリアとは，単に仕事を意味するのではなく，人が生涯の中で様々な役割を果たす過程で，自らの役割の価値や自分と役割との関係を見出していく積み重ねの経験を意味することを調査協力者に，あらかじめ文書と口頭で伝えている．

(9) モンゴルでは遊牧民が生活していくために，ヒツジやヤギを飼って生活している．最近の傾向としてカシミヤとして市場に売れるヤギの方を選んでいる．ヤギはヒツジに比べて根っこまで草を食べてしまうので，砂漠化が進んでいるという問題を学んだとのこと．

(10)「グローバル市民」を多様性や公正の価値，コミュニティへの参加，持続可能な社会のための行動などの資質を備えた人間として定義している．

引用文献

芦沢慎吾（2013）日本の学生国際交流政策−戦略的留学生リクルートとグローバル人材育成．横田雅弘・小林明（編）大学の国際化と日本人学生の国際志向性．学文社．pp.13-38

藤原孝章（2016）グローバル教育の内容編成に関する研究−グローバル・シティズンシップの育成を目指して．風間書房．pp.1-5，pp.259-279

文部科学省（2011）産官学によるグローバル人材の育成のための戦略．http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2011/06/01/1301460_1.pdf（2018/09/15）

中西啓介・若林真美・榊原久孝・入山茂美・浅野みどり・里中綾子・星野晶成（2018）分野横断型プログラムにおけるミャンマー海外実地研修−どのようにミャンマー研修は成立したか−．名古屋大学国際教育交流センター紀要 第5号．pp.33-41

中矢礼美・梅村尚子（2013）海外体験学習における学びの質的変化を促すコンピテンシー評価の有効性．広島大学国際センター紀要3号．pp.15-28

子島進・藤原孝章（編）（2017）大学における海外体験学習への挑戦．ナカニシヤ出版．p.1

日本学術振興会（2011）博士課程教育リーディングプログラム．http://www.jsps.go.jp/j-hakasekatei/index.html（2018/09/15）

大阪大学グローバルコラボレーションセンター（2016）外部評価報告書2013-2015年度 http://hdl.handle.net/11094/54715（2018/09/15）pp.19-22

新見有紀子・岡本能里子（2017）海外留学とキャリア形成−機関別でみる海外留学のインパクト．子島進・藤原孝章（編）大学における海外体験学習への挑戦．ナカニシヤ出版．pp.162-181

思沁夫・上須道徳（2018）出会いから始まったフィールドスタディ．大阪大学グローバルイニシアティブ・センター．p.1

敦賀和外・本庄かおり・安藤由香里・片山歩（2016）海外フィールドスタディ（FS）の運．GLOCOLブックレット 18．pp.112-118